



 Data	2022-132
監督: 石川慶	
脚本: 向井康介	
原作: 平野啓一郎『ある男』	
出演: 妻夫木聡/安藤サクラ/窪田正孝/清野菜名/真島秀和/小藪千豊/坂元愛登/山口美也子/きたろう/カトウシンスケ/河合優実/でんでん/仲野太賀/真木よう子/柄本明/小野井奈々	

みどころ

近時の邦画は単純そのものやバカバカしいものが多いが、たまには「骨太もの」や「これは傑作!」と思えるものもある。「原作もの」が多い昨今だから、原作の良し悪しにも影響されるが、平野啓一郎の原作『ある男』は大傑作。まずは、冒頭に提示される二人の男の絵はナニ?

本作はタイトル通り「ある男」の調査から始まるが、ポイントは戸籍交換。その“取材者”は城戸弁護士だが、彼も在日3世だというのがミソだ。「え! そんな! ?」と思える展開を含めて、中盤のミステリアスな展開は興味深い。そこで次第に浮上してくるテーマが“宿命”。そう聞くと、邦画の最高傑作『砂の器』(74年)と相通じるものが。

弁護士としては、なぜ日本は夫婦別姓ではないの? という問題意識を持ってしまいが、大人たちの事情で姓がコロコロとかわる子供の立場からは、それをどう考えればいいの?

■□■ 湊かなえ VS 平野啓一郎、原作と映画の優劣は? ■□■

本作と相前後して観た『母性』(22年)は湊かなえの原作を映画化したもの。それに対して、本作は平野啓一郎の原作を映画化したものだ。両者ともトップを走るベストセラー作家だが、私の評価では『母性』は全然ダメだったが、本作はメチャ面白かった。したがって、その優劣は明らかだ。『母性』は冒頭、女子高生の自殺シーン(?)から始まったが、『ある男』と題された本作の冒頭は、黒いスーツを着た2人の男の背中が描かれた絵のクローズアップから始まる。これは一体ナニ?

本作のストーリーは、成文堂文具店の店番をしているシングルマザー・里枝(安藤サクラ)と何度もその店を訪れて画材を購入する男・谷口大祐(窪田正孝)との会話から始ま

っていく。チェーンソーで大木を切る林業の仕事に従事していた大祐は、そんなきっかけから里枝と再婚し、女の子までもうけて幸せに暮らしていたが、ある日、大木を切っていた大祐が不慮の事故で即死。悲しみの中で葬儀を終えた里枝は、長年疎遠になっていた大祐の兄・谷口恭一（眞島秀和）と法要の席ではじめて会ったが、遺影を見た兄は、「これ、大祐じゃないです！」と衝撃の告白を！これは一体ナニ？こりゃ面白くないわけがない！

■□■主人公は“ある男”ではなく、城戸弁護士！■□■

大祐の兄・恭一の言葉に里枝が絶句する導入部に続いて、飛行機に乗って横浜から熊本に向かう弁護士、城戸章良（妻夫木聡）の姿が映される。城戸はかつて横浜で里枝の離婚調停事件を担当した弁護士だが、今回の里枝からの依頼は“真相の解明”。それはとてつもなく難しい依頼だが、彼は、「あなたの亡くなったご主人をXと呼ぶことにします。」と述べて動きはじめたから偉い。着手金のことも報酬のことも話していないから、これひょっとして“人権派弁護士”としてのボランティア・・・？

そんな私流の下衆の勘ぐり（？）はともかく、本作最大のポイントは、言うまでもなく城戸が同僚の中北（小藪千豊）と共に真相究明の行方。しかし、もう一つのポイントは、城戸弁護士の出自、つまり彼が在日3世ということだ。Xのことを知る男・小見浦憲男（柄本明）にはじめて刑務所内で面会した城戸が、「あんた在日3世でしょう。顔を見ればすぐにわかる。」と言われるシークエンスも面白いが、人権派弁護士でありながら、美人妻・香織（真木よう子）と結婚し、香織の両親の手厚い庇護を受けている姿も面白い。

城戸がX探しを続ける中、妻との確執がいろいろと表面化し、城戸はいかに自分と向き合うのか、という問題が提起されるので、それに注目！そのため、『ある男』と題された本作では、本来「ある男」が主人公のはずだが、実は城戸弁護士が主人公になるので、それにも注目。

■□■調査は難航！しかし、ある事件との繋がりが！■□■

松本清張の原作を映画化した邦画の最高傑作『砂の器』（74年）は、ベテランと若手の刑事コンビによる執念の捜査が、今は有名ピアニストとして活躍し、今日は晴れのリサイタルで演奏している殺人犯、和賀英良の逮捕に結実した。しかし本来、弁護士による調査など何の強制力もないから、たかが知れたもの。離婚調停でお世話になり、良い解決してもらったとしても、そもそも里枝がXの調査を城戸弁護士に依頼するのは無理筋だ。調査に要する時間は膨大だから、当然、調査費用も膨大になるから、費用対効果、つまり最近流行りのコスパ（コストパフォーマンス）の面からも、あまり意味はない。

とは言っても、Xの調査に乗り出した城戸が“本物の大祐”の元恋人だったという後藤美涼（清野菜名）にたどり着いたのは立派。ある日突然姿を消した恋人、大祐の行方を案じていた美涼は城戸の調査に協力したが、Xにつながる手がかりは何も見つけられなかった。しかしある日、行き詰まった城戸から相談を持ちかけられた中北は、彼が過去に担当した“ある事件”と“ある男”との繋がりを浮かび上がらせていくことに。その“ある男”

とは戸籍売買という闇のネットワークをしていた男、小見浦憲男。彼は詐欺事件で服役中だったが、城戸が面会してみると・・・。

更に、ある日、死刑囚の絵の展覧会に参加した城戸は、X が描いた絵のタッチとそっくりの死刑囚の絵を発見したからビックリ。その死刑囚・小林兼吉は一家惨殺放火事件を起こした犯人だが、その顔写真を見ると X にそっくりだったから、更にビックリ！そこから急浮上してきた人物が小林兼吉の一人息子・原誠だが、さて・・・？

『砂の器』では、映画冒頭に起きた殺人事件の背景に、ハンセン病問題や戸籍売買問題があったことが興味深く描かれていたが、さて、平野啓一郎の原作は、そして、それを映画化した本作は？

■□■『あしたのジョー』のような展開も！それは一体なぜ？■□■

ボクシング映画の金字塔はなんと言っても、全6作も作られたロッキーシリーズだが、私の大学時代に大ヒットし、団塊世代のバイブルになったのが、ちばてつや原作の漫画、『あしたのジョー』だ。山下智久が矢吹丈役に、伊勢谷友介が力石役に扮した『あしたのジョー』（11年）（『シネマ26』208頁）は名作だったが、なぜか本作中盤にも、ボクシングの新人戦でのチャンピオンを目指す若者が登場するので、それに注目！

平野啓一郎の原作を事前に読んでいる人には、あらかじめ本作のストーリー構成が頭に入っているが、そうでない人には、なぜそんなシークエンスが登場してくるのか、すぐには理解できない。そして、それはXの調査にあたっている城戸弁護士も同じだ。せっかく服役中の小見浦に面会をしても、彼の口から出てくるのは、城戸に謎をかけるような、さらに城戸をからかうような断片的な話ばかりだから始末が悪い。しかし、そんな彼の言葉を頼りに、城戸はボクシングジムを経営している男・小菅（でんでん）を訪れたが、そこから何を聞き出すことができたの？そんな本作中盤のミステリアスな展開は、『砂の器』の時と同じように、あなた自身の目でしっかりと！

■□■なぜ夫婦は同じ姓を？夫婦別姓なら・・・？■□■

本作冒頭、シングルマザーとして文具店を切り盛りしている谷口里枝が不意に涙をこぼすシーンが登場する。これは、里枝が幼い子供を病気で失った悲しい過去を持っているためだということが後に判明するが、その子はそもそも誰と誰との間に生まれた子供？ちなみに、生まれた時の里枝の姓は武本。里枝の母親・武本初江（山口美也子）は今も健在だ。しかし、里枝が横浜の裁判所で離婚調停をした相手である夫の姓は示されないが、その間には長男・悠人（坂元愛登）が生まれていたから、悠人は里枝とともに旧夫の姓を名乗っていたはず。しかし、母親が離婚し、旧姓の武本に戻ると、悠人も武本に戻ったの？そして、里枝が“偽の谷口大祐”と再婚して谷口姓になると、悠人も谷口姓になっていたの？他方、“偽の谷口大祐”と再婚した里枝は、悠人の妹になる女の子・花（小野井奈々）を生んだから、当然、花の姓は谷口だ。しかし今や、死んでしまった父親はXで本物の谷口大

祐でなかったことは間違いないから、そんな場合、里枝と悠人と花の姓はどうなるの？もしXが発見され、その姓が仮に山田だとすると、里枝も花も谷口姓から山田姓に改めなければならないの？さらに悠人の姓は？

城戸弁護士の調査が進んでいく中、子供心にそんな疑問を持った悠人から、そんな質問を受けた里枝は、どう答えるの？そもそも、X が山田姓だとわかったら、里枝も谷口姓から山田姓に切り替えなければならないの？

そんな法律問題は、今や実務を長く離れている弁護士の私ですらよくわからないが、そんな問題が起きるのは「夫婦は同じ氏を称しなければならない」と定めた憲法や民法の規定のためだ。中国では夫婦別姓が当然だが、なぜ日本は夫婦別姓にしないの？もしそうなれば、本作で悠人が里枝に聞いたような質問はなくなるはずだが・・・。

■□■あの絵は？本作のテーマは『砂の器』と同じ“宿命”！■□■

今作のパンフレットには、森直人（映画評論家）のCOLUMN『私』をめぐる無間地獄Xと城戸を繋ぐ、宿命と虚無がある。その書き出しは、次の通り。私が全く知らなかった、本作冒頭に登場する絵についてだ。

原作小説の序文で言及される、ルネ・マグリットの1937年制作の絵画「複製禁止」が映画『ある男』のメインモチーフとなる。バーの壁に飾られたレプリカという形で冒頭と最後のシーンに登場。これは詩人エドワード・ジェームズの肖像画だと言われるが、顔は描かれていない。鏡に向かう男は後ろ姿で、鏡に映る彼もまた後ろ姿。すなわち私は、私の顔（正体）を見ることができない。「私」をめぐる無間地獄が、この映画では重層的なミステリーとなって展開する。

同コラムはその後、筆者流の問題提起を経て、本作の推進力のエンジンである戸籍交換に触れた上、

そのジョーカーのカードを配る男―「戸籍交換」という裏ビジネスを請け負うブローカー、収監中の小見浦憲男（柄本明）の登場シーン計二回は、間違いなく本作のハイライトのひとつだろう。

と指摘。そして、取材者として登場したはずの城戸弁護士が「事件の本質を露骨に体現するような主体へと転倒していく」姿に本作の主題を見出していき。そしてラストには、「虚無を隠し持つ妻夫木総。苛酷な宿命と寡黙に闘う、灼熱の魂を肉体化した窪田正孝。妥協なきスタッフとキャストの連携は、現在の日本映画の最高峰と呼べる成果だ。」とまとめている。

この小難しいコラムは必読だが、これを読むまでもなく、私が本作を観て感じたテーマは、『砂の器』と同じ“宿命”。「宿命」は和賀英良がリサイタルで発表する自作のピアノ協奏曲のタイトルだが、同曲はピアニストとして大成功を収めた今の自分の姿から、自分の“宿命”であった、ハンセン病の父親と共に迫害の中で続けた巡礼の旅をたどるものだった。

た。

本作冒頭に見るニセの谷口大裕は、不器用な対応の中で里枝と結婚できたことが本当に幸せだったはず。林業の仕事をしながら、ささやかな人生を里枝と共に生きることができれば、幸せな一生になっていたはずだ。ところが、あんな事故に遭遇したことによって、城戸弁護士が取材者として登場し、谷口が背負う“宿命”が本作のように暴かれてしまうことに。そんな本作は、前記コラムで、森氏が「何度観ても素晴らしい！」と絶賛する通りの傑作だから、これは必見！

2022（令和4）年12月19日記

追記 第46回日本アカデミー賞8冠をゲット！

1) 第46回日本アカデミー賞の授賞式が2023年3月10日、東京都内のホテルで開かれ、石川慶監督の『ある男』が作品賞や監督賞など最多8部門で最優秀賞を受賞した。

『ある男』は平野啓一郎の小説が原作。死別した夫の身元調査という依頼を受けた弁護士が、別人として生きた男の真実を追うミステリーだ。出演の妻木木聡が主演男優賞を受賞。窪田正孝と安藤サクラも、助演男優賞と助演女優賞にそれぞれ輝いた。さらに、向井康介が脚本賞、石川慶が編集賞、小川武が録音賞を受賞したため、『ある男』は合計8冠をゲット！

2) なお、同賞の主演女優賞には『ケイコ 目を澄ませて』の岸井ゆきのが選ばれた。

2023（令和5）年4月10日記